



平成9年度(第6回)ブループラネット賞
受賞者記念講演会

財団法人 旭硝子財団

THE ASAHI GLASS FOUNDATION

目次

受賞者紹介

| | |
|-----------------------|---|
| ジェームス・E・ラブロック博士 | 1 |
|-----------------------|---|

記念講演

| | |
|-------------------------------------|---|
| 「地球環境への旅 超高感度分析器(ECD)がもたらしたもの」..... | 2 |
|-------------------------------------|---|

受賞者紹介

| | |
|---------------------------|----|
| コンサーベーション・インターナショナル | 10 |
|---------------------------|----|

記念講演

| | |
|--|----|
| ラッセル・A・ミッターマイヤー博士 「地球生物多様性の保護 挑戦と優先順位作戦」..... | 11 |
|--|----|

| | |
|-----------------|----|
| ブループラネット賞 | 24 |
|-----------------|----|

| | |
|----------------|----|
| 旭硝子財団の概要 | 26 |
|----------------|----|

| | |
|--------------|----|
| 役員・評議員 | 27 |
|--------------|----|

<制作スタッフ>

運営担当 (株)インターグループ
プロデュース (株)アイ・アール ジャパン

受賞者紹介

コンサベーション・インターナショナル(本部:アメリカ合衆国)



受賞業績『地球の生物多様性を維持するため、学術研究と調査に基づいて確立した方策にそって、環境を保護しながら地域住民の生活向上を図る研究とその実証を効果的に推進した業績』

コンサベーション・インターナショナル(以下、CI)は、1987年に設立された民間非営利の国際環境保護組織で「地球の生物多様性を保護すると共に、人間と自然とが調和を保って共生できることを立証すること」を使命としています。アメリカ合衆国のワシントンDCに本部を置き、ラッセル・A・ミッターマイヤー博士とピーター・A・セリグマン氏が中心となり、現在世界24カ国に拠点を持ち、国連や世界銀行をはじめとする国際機関や政府、研究機関、現地NGO、企業などとパートナーシップを組んで、400名以上の専従スタッフが活動しています。

この組織の特徴は、世界第一級の学術研究を基礎に、経済面での持続可能性や文化的背景などに十分配慮しながら、途上国における経済発展と生物多様性維持との調和を図っている点にあります。

- 1) CIは、科学的な調査に基づき、緊急な保護を要する地域として「ホットスポット(危険地域)」を設定し、熱帯雨林や珊瑚礁などの保護を進めています。CIは現在、熱帯を中心に世界の26地域を生物多様性のホットスポットに特定し、そのうち12地域で活動しています。
- 2) CIは、緊急に保護対策を必要とする地域の生物学・生態学上の調査を行い、迅速に関係機関に報告し保護活動を早期に実施するため、緊急調査活動「ラピッド・アセスメント・プログラム」を行ってきました。1990年にはボリビアのマディディ地方でこの調査を行い、その提言を受けたボリビア政府はこの地域を国立公園として保護することを決定しました。またこの調査の過程で、いくつもの新種が発見されています。
- 3) 生物多様性に関する知識の普及のためCIは、異なる読者層を対象に数種類の出版物を発行をしています。その一つが、生物種に関する研究を活性化させ、またエコツーリズムを促進させることを目的に、熱帯地方の主要な生物について科学的な情報を記載しているCI熱帯ガイド・シリーズです。
- 4) 最も絶滅の危機に瀕している種の一つである霊長類の保護は、生態系保存の象徴的な意味をもっています。CIは霊長類の宝庫であるマダガスカルやアマゾンで生物学・生態学的研究を進め、アマゾンでは新種を発見しています。
- 5) CIでは「バイオ・プロスペクティブ・プログラム」として、南米スリナムの森で、企業と現地政府の協力を得て、医薬品向けに生物種を発見して利用するための研究を、先住民の知的所有権を認めながら進めています。そして「シャーマン(薬草人)プログラム」として、先住民の植物などの伝統的な利用方法を学んだり、森林の生態系と共存して生きる民族の貴重な知識を保存する活動を行っています。
- 6) CIは「自然と負債のスワップ」という手法を世界で初めて導入しました。1987年にボリビア政府の外貨建て負債の一部をCIが支払い、政府がCIの提言にそって保護すべき地域の運営に必要な資金を自国通貨で準備し、その地域の法的保護を約束したものです。この手法は、その後多くの環境保護団体や政府によって踏襲され、今日その総額は1億ドルに達しています。
- 7) エクアドルでは、熱帯林で採れるタグア(象牙椰子)の実からボタンやジュエリーをつくり、国際市場に流通させることで地元で収益をもたらし、その伐採を防いできました。この活動は「タグア・イニシアティブ」と呼ばれ、1994年には国連環境計画により、世界の代表的な10の持続可能な開発プロジェクトの一つに選ばれました。

このようにCIは、学術上の調査を進めて、生物多様性の維持のために重要な地域を特定し、地域住民の生計を向上させながら環境の保護を進める方法を開発しています。生物学、生態学上の多くの貴重な成果と合わせ、生物多様性の保護への貢献が極めて顕著です。

「地球生物多様性の保護 挑戦と優先順位作戦」

コンサベーション・インターナショナル理事長
ラッセル・A・ミッターマイヤー博士

今、新しい世紀を迎えようとして、わが地球と生物種はかつて経験した中で最も厳しい状況を迎えています。その状況とは、核戦争や共産主義の拡大、あるいは20世紀の大半に遭遇した地球政治学的問題ではなく、なんと環境にかかわる問題です。地球は現在、発展途上国の人口過剰や先進国の過剰消費（比較的豊かな途上国でもそうなりつつあります）、地球温暖化、オゾン層の破壊、有害廃棄物の処理、土壌浸食、大気汚染、土壌汚染と水質汚濁、そのほか環境にストレスを与えるさまざまな問題に直面しています。より目につきやすいいわゆる準危機的な環境問題もたくさんあり、それらの方が、都市化の様相を深める地球社会にとって、より緊急の課題に見えるかもしれません。しかし、長い目で見た重要性という点で、ほかの環境問題をはるかに凌駕する問題があり、それはすなわち地球の生物多様性の喪失です。

生物多様性とは、簡単に言えば、「地球上のあらゆる生命の総体」であり、私たちの住んでいる惑星を現在の形にしている生物種、生態系、そして生態学的プロセスの一切を意味しています。それこそ私たちの生きた自然資源の土台であり、“地球銀行”の生物資本にほかなりません。そして、なにより重要なことは、それが一度失われれば復元不可能なプロセスだという点です。私たちは準危機的な環境問題の大半については技術的解決法をすでに開発したか、または解決が可能です。ただ、経済的インセンティブや政治的意志が欠けているために実行されていないのに過ぎません。それに対して、生物多様性の喪失は全く次元の違う問題です。ある植物種または動物種がいったん絶滅してしまったら、それは永久に失われてしまうのであり、二度と再びその姿を見ることはできません。私たちが直面しているのは、単なる個々の種の絶滅ではありません。究極的には、人類の存続がかかっている地球上の全社会とその生態系の弱体化および消滅なのです。

集団絶滅がすでに進行中であることを示す一例として、“両生類衰退現象”があります。現在、地球全体に見られることですが、ある種の希少ガエルや一定地域の両生類はすでに絶滅しかかっており、従来よく見かけた種類の両生類が希少種になりつつあったり、あるいは突然変異種や遺伝的欠陥のある個体が出現しているのです。コスタリカのある狭い地域の雲霧林（cloud forest）から金色ヒキガエルが姿を消したのは、この現象の象徴的な例と言えます。野生の金色ヒキガエルは、この十年来、全く見つかっておりません。私たち20世紀の人間がこれまでほかにどんな実績を上げてこようと、新世紀の出発点において社会全体として成功したかどうかを未来の世代から判定される基準は、私たちが今世紀初めに受け継いだのと同じ健全かつ多様な生きている地球を維持できたかどうかにあるでしょう。

コンサベーション・インターナショナルの使命は、「わが地球の生物多様性を保全し、人間と自然が調和を保って共生できることを立証すること」にあります。私たちは、設立して最初の10年間を、この複雑な目的を達成するための解決法を生み出すことに捧げてきました。本日の講演では、私は生物多様性保全の課題において直面している重要問題のいくつかを明らかにし、明確な優先順位を設定するという基本的な役割について、そして、地球の生物多様性が今日でも息づいている遠い地域の自然の中で迅速な保護行動を起こす必要性について、お話ししたいと思います。

地球生物への理解度 - どれほど知っているのだろう

生物多様性保全における最も重要な問題を考える際に、ぜひ認めなければならないのは、私たちの文化は、地球上の人間以外の生物について、いまだに驚くほど無知だということです。科学者たちがこれまでに明らかにした植物・動物・微生物はわずかに140万～180万種にすぎませんが、地球上に存在する全生物種は1,000万種、3,000万種、あるいは1億種以上と推定されています。さらに、それらの間に存在する複雑な生態的な相互作用を考えるならば、また、それらを解明する科学が言うなればまだほんの幼児期にある点を考えるならば、その無知たるや推して知るべしでしょう。

私たちは、太陽系のはるか彼方へ宇宙船を送ることができます。事実、アメリカが過去10年間に地球外の生命を探る目的の火星探査機1機に投じた資金は、地上の生物多様性研究に投じた金額より多かったです。私たちはまた、小さなコンピューター・チップに何百万ビットもの情報を載せることができますし、複雑高度な情報ハイウエーを開発したり、世界銀行や各種の国連機関などといった、膨大な金額を「持続可能な開発」という、価値はあるが中身のはっきりしない目的に投資する国際機関を持っています。

にもかかわらず、私たちは、人類が一体どのくらい多くの生物種とこの惑星を共有しているのか、その数は数千万とも数億とも言われ、はっきりと把握されていません。そのような無知にもかかわらず、生物資源の利用を前提にして持続可能な開発を達成しようとするのは、屑鉄数片とハンマー1本、錆びたクギ数本で火星探査機を作ろうとするに等しい行為です。素晴らしい先端技術を持った洗練された21世紀社会は、人間以外の地球生物に関する理解度という点からすると、多くの面でいまだ“暗黒時代”にあると言っていていいでしょう。

この無知という点について、私個人の経験した例をお話ししましょう。これは霊長類です。熱帯雨林の奥深い懐に住む小さな甲虫類や土壌に住むさまざまな微生物、あるいは深い海溝の底に住む珍しい生物のことなら、すべてが分類されていなくとも、さして驚くことではありません。しかし、少なくとも人間の親戚とも言うべき霊長類のことなら、すべて分かっているとお思いでしょう。ところが、私たちは霊長類についてすら、それほどよく分かっていないのです。

これは、1992年に私がブラジル中央部のアマゾンで発見・記載したマーモセット（キヌザル）です。そして、こちらは今年、やはりブラジル中央部アマゾン流域で発見・記載した小型のマーモセットです。ブラジルでは、1990年以降、7種の新しい霊長類が発見されていますが、これらはそのうちの2種にあたります。同僚のブラジル人と私は、さらに数種の霊長類を見つけていますが、それらについては今、科学的に記述されるのを待っているところです。マダガスカルでは、この10年間で、レミュー（キツネザル）の新種2種類が発見・記載され、さらに3種類の生存が140年のプランクを経て、再び確認されました。また、ベトナムでは、科学者たちが地元の市場で“ブッシュミート”として売られている肉を調べていて、大型のアンテロープ（レイヨウ）の新種を2種類発見しました。このように、私たちの生物多様性に対する無知は、昆虫や微生物に限らず、あらゆる生命体に及んでいるのです。

私たちは、生物多様性の本当の価値についても、同様に無知の状態にあります。生物多様性が現在、私たちにどんなに役立っているか、そして、将来どのように役立つ可能性があるかについて、無知なのです。現在ようやく、いくつかの分野で「生物多様性評価学」と言われる科学が生まれつつあります。

私たちは、熱帯雨林や海洋から新しい医薬品や農産物が生まれる将来の可能性について漠然と触れたり、あるいは農作物の野生種が遺伝子の多様性や病害への抵抗力を維持する上で重要なことはある程度知っています。森林について言えば、木材やゴム、籐やブラジルナットといった定期的に国際取引引きされるほんの少数の林産物の経済価値は承知しています。しかしながら、熱帯やその他世界各地の地域内市場やローカルな市場で、あるいはまた家庭で利用されている膨大な生物多様性については、ほとんどが認知されていなければ調査されたこともありません。国民所得の統計の対象になったこともありません。河川の流域や湿地の莫大な価値を守る上で森林が持つ重要性も一般的には認められていますが、経済用語で評価されたことはほとんどありません。ただし、最近の研究によって、河川流域が年間数兆ドルの価値を持っていると評価されたことは、生きている生態系が人間に対して持っているとても重要な重要性をはっきりと示しているのではないのでしょうか。生物多様性と自然の生態系がレクリエーションという点で私たちにもたらす価値については、ようやく研究が始まり認知されてきました。とくに近年はエコツアーが急増しています。しかし、それらが与えてくれる美的、精神的恩恵は捉えにくいので、まだよく理解されていないと言ってよいでしょう。私たちが生物多様性の評価能力を得るには、道は遠いと言わざるを得ません。この種の分析を行うのに必要な測定法さえ持っていないのですから。近い将来、さらなる努力が必要なのは明らかです。

地球の生物多様性を保ち、迫りくる絶滅の危険、あるいはすでに進行中の絶滅への歩みを止めようとするとき、とくに二つのことが問題となってきます。一つは、私たちの作業には時間制限があることであり、二つ目は、優先順位を設定する必要のあることです。熱帯雨林を例にとりますと、20世紀初頭に地球上に存在した原始熱帯雨林のうち、今日そのまま残っているのはおよそ40%、6割はすでに失われています。しかし、それでもまだ大したことはないかのようにいくつかの国では大変にひどい状況にあり、当初の熱帯雨林のなんと97%が消えている地域もあります。地域によっては、こうした傾向を阻止するために残さ

れた時間は、現在の破壊速度でいくと多くて5～10年です。また阻止できたとしても、かつて存在した自然の代表的な名残りを救えるにすぎませんが

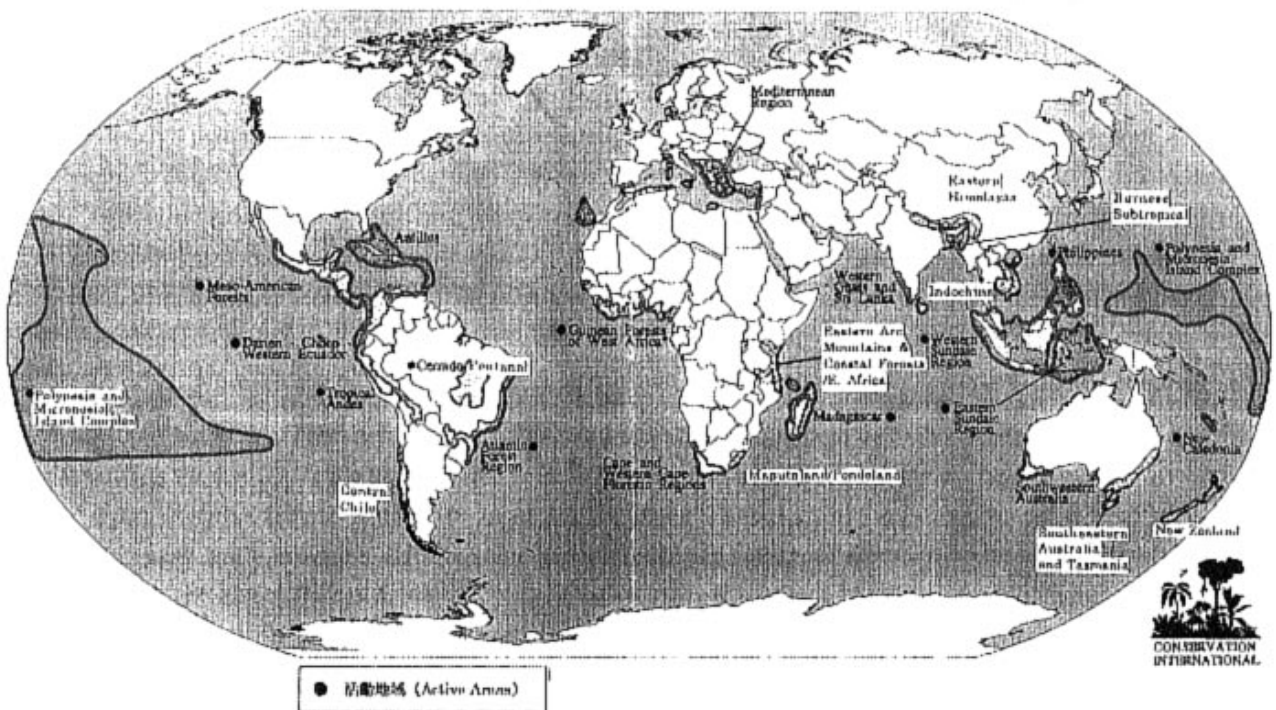
優先順位作戦 - どこから手をつけるのか？

同様に大変重要なのは、どこから手をつけるかという優先順位を決めることです。生物多様性は地球上に均等に存在しているのではなく、ある地域や国がほかの場所より豊富なのです。コンサベーション・インターナショナルでは、すべての地域を手がけようとはしないで、限られた資金や人材や時間を、生物多様性が最も豊かでかつ最も危機にさらされている地域に集中的に投じようと当初から決めていました。この基本原則は、イギリスの科学者ノーマン・マイヤーズが1988年に発表したコンセプトで、“絶滅の危機にあるホットスポット”と言われる地域を優先するやり方です。

このコンセプトは、その後、私たちとマイヤーズが共同で改善してきましたが、それによりますと、ホットスポットのうち約25%がとくに重大な意義を持っています。これら生物多様性がそのまま残っている生息地は、地球の陸地面積のわずか2%にすぎませんが、そこに生息している生物種は地球の全陸上生物種の50%以上を占め、しかも最大の危機にある生物種の4分の3以上を含んでいます。こうしたホットスポットは生物多様性が豊かであるにもかかわらず、残存している植生が当初の25%を割っているという最も絶滅の危機にある生態系です。

その対極にあるのが、残された最後の自然の楽園とも言うべき主要熱帯雨林地域であり、ホットスポットと同じように生物多様性に富んでおり、当初の植生がまだ75%以上も残っています。そして、人口密度が1平方キロあたり5人以下と非常に低い点でホットスポットと異なっています。これらの地域は、数も少なく非常に不便な所にありますが、いろいろな理由から地球全体にとって極めて大きな重要性を持っています。例えば、そこは原住民部族社会が伝統的なライフスタイルを多少なりとも保てそうな最後の場所です。南米のアマゾン上流地域、ギアナ南部、同じく南米のベネズエラ南部、コンゴ盆地、ニューギニア島の大部分などがそうです。不幸なことに、これら手つかずの自然地域も、今日では絶滅の危機にさらされているのです。

コンサベーション・インターナショナルでは、いわゆる「メガダイバーシティ・カントリー」についても重点的に活動しています。メガダイバーシティ・カントリーとは、世界に230以上ある国々の中のわずか17か国ですが、そこに水陸合わせた地球上のすべての生物の3分の2以上が生息しています。ブラジル、インドネシア、コロンビア、メキシコ、オーストラリア、マダガスカル、中国、フィリピンが主な



グローバル・ホットスポット

国々で、ペルー、エクアドル、ベネズエラ、パプアニューギニア、マレーシア、インド、コンゴ民主共和国、南アフリカ、アメリカモリストに入っています。

メガダイバーシティ・カントリーの重要性を納得していただくために、例を挙げましょう。例えば、これらの国のうち、ブラジル、インドネシア、コンゴ民主共和国の3か国だけで、世界の熱帯雨林のほぼ半分を占めています。霊長類を再び例にとりますと、人間以外の霊長類は世界92か国に分布していますが、ブラジル、インドネシア、マダガスカル、コンゴ民主共和国のたった四つのメガダイバーシティ・カントリーだけで、霊長類種目の3分の2を占めており、しかもその中に最も絶滅の危機に瀕している種が含まれています。

こうした優先地域の中から、2、3の例をとって簡単にご紹介しましょう。地球上で生物多様性の最も豊かな2大メガダイバーシティ・カントリーの一つであり、最優先のホットスポットに入るブラジルの大西洋岸熱帯雨林、絶滅の危機にあるホットスポットであると同時にメガダイバーシティ・カントリーでもあるマダガスカル島、そして熱帯雨林が自然のままに残っている南米の小国スリナムとニューギニア島などです。

ブラジル大西洋岸

まず、ブラジルの大西洋岸熱帯雨林についてお話ししましょう。アマゾン自体についてはたくさんのご話が語られていますが、大西洋岸熱帯雨林は、疑いもなくこの国で最優先の保護対象地域です。大西洋岸熱帯雨林地域は、北西に広がる広大なアマゾンの森林と明確に異なる独特の一連の生態系で、かつてはブラジルの北東部リオグランデノルテ州から最南部のリオグランデスル州まで延々連なる面積120万平方キロメートル、日本全土の3.2倍もある広大な森林でした。19世紀初め、この地域に自然探検家が初めて分け入ったとき、そこは地球上で最も豊かな、天を突く大木の生い茂る壮大な森でした。とりわけランやパイナップル科の植物群が咲き乱れ、多種多様な動物群がたくさん生息していました。

しかし、大西洋岸熱帯雨林地域は、ブラジルの最初の入植開拓地であり、やがてこの国の農業と工業の中心地に発展していきました。今日、南米の3大都市のうちサンパウロとリオデジャネイロの二つまでがここ大西洋岸にあります。リオデジャネイロは、世界2大都市の一つでもあります。その結果は、大規模な森林破壊でした。とくにここ30年間の急速な経済発展によって、最初は木材や木炭を得るため、次には農園や牧草地、あるいは工業のために破壊が進みました。このサンパウロ州の地図を見れば、何が起こったかがよく分かるでしょう。開発は16世紀から行われてきましたが、自然への圧力が現実のものとなったのは20世紀に入ってから、とくに1950年以降のことです。かつてこの重要な州に広大な広がりを見せた森林は、現在ではその3%が残っているにすぎません。

サンパウロ州以外の地域でも同じ状況にあり、私たちの試算によると、大西洋岸熱帯雨林でいまだに残存しているのは当初のせいぜい8%であり、州によっては残っている自然林は1%以下となっています。残存している森の大半は、規模が小さく孤立しており、開発されて環境の悪化した土地に周囲を取り巻かれ、まるでパッチワークのようになっています。セラドマール山地、とくにサンパウロとパラナ沿岸に沿った地域、そしてリオデジャネイロとエスプリトサントスの一部の地域にだけ、ある程度の連なりを持った森林が残っていますが、それとても危険にさらされています。

皆さんもお分かりのように、大西洋岸熱帯雨林に生息する動物や植物が、そんな環境のもとでうまく存続していけるはずはありません。ですから、大西洋岸熱帯雨林が陸上生物多様性の最も集中した地域の一つであると強調するのは、大変重要なことなのです。事実、この地域には推定2万種の高等植物が存在し、そのうち6,000種はこの地域にしかない固有種です。また、哺乳動物261種(固有種73)、鳥類620種(固有種160)、両生類260種(固有種128)も生息しています。実に豊かな多様性を持つ大西洋岸熱帯雨林は、世界の5大ホットスポットに入っています。もし、これが国であったなら、その国は生物多様性で世界10大国に入るでしょう。

不幸にして、このように見事な生物多様性の多くが、現在大きな危険にさらされています。その好例が霊長類です。大西洋岸熱帯雨林には6属、24種・亜種の猿類が見られますが、私たちが1979年以来行ってきた調査によると、優にその79%が固有種です。

とくに、南米で最も大型のサル、マリキ(Brachyteles属)と、有名な金色ライオンタマリンを含むライオンタマリン(Leontopithecus属)は、その存続の危機が叫ばれている種属です。ライオンタマリンには、

金髪ライオンタマリン、ブラックライオンタマリン、黒髪ライオンタマリンという、金色ライオンタマリンと同属の3種の美しいサルも含まれています。黒髪ライオンタマリンは、1990年以降、見つかっていません。マリキとライオンタマリンは、世界で最も絶滅の危機にある霊長類属の代表的な2例であり、世界中でもこの地域に残った森林でしか見られなくなりました。そして、その頭数は激減しています。金色ライオンタマリンがわずか470～631匹、ブラックライオンタマリン約1,000匹、黒髪ライオンタマリン400匹、マリキは北方種が234匹、南方種が924匹です。金髪ライオンタマリンは、推定数6,000～15,000匹と若干多いのですが、それすら存続が危ぶまれています。

最近では、これらのユニークで魅力的なサルたちは、この地域で最も重要な存在となってきました。それによって、金色ライオンタマリンは捕獲増殖が成功していますし、国際的な研究教育計画の対象ともなりました。これらのサルの種自体を保護するためだけでなく、その生息地全体も同様に保護するためのさまざまなキャンペーンや調査計画において、サル達はその役割を果たしています。その結果、1980年代初めごろはブラジルの国民もほとんど知らなかったこれら2種類のサルが、現在では大変人気のある動物となり、電話帳の表紙や切手に使われたり、パレードや劇場公演のテーマになったりしています。有名なリオのカーニバルでは“山車(だし)”の飾り人形となり、またローカルな民謡にも歌われるようになりました。

さらに重要なことは、こうして絶滅の危機にある種をシンボルに使うことによって、それまでほとんど知られておらず、見過ごされてきた地域を、国内的にも国際的にも注目を浴びる存在にしたことです。現在では、大西洋岸熱帯雨林を焦点にあてたさまざまな保護計画に何千万ドルにも上る資金が集まるようになりました。最近の最大の資金援助は、世界銀行と欧州連合(EU)が検討している4,000万ドルの「回廊プロジェクト」でしょう。信じられないようですが、もし小さな可愛いサルたちの強烈な魅力がなかったら、この保護計画の大部分は、実現しなかったと思います。

マダガスカル島

さて、大陸の話から、今度は世界で最もエキゾチックな地域、マダガスカル島へ飛んでみましょう。この旅行は、単に世界の別の地域に移動するというだけではありません。進化の歴史を何百万年も遡ることなのです。マダガスカルはユニークな進化の実験室であり、地球上の他所にはない生きた研究室と言えます。アフリカ東岸からわずか400キロしか離れていないにもかかわらず、長い年月、おそらく1億6,000万年ほどアフリカ本土とは隔絶されており、生息している動植物の大半は独自の進化を遂げて、この島以外、世界のどこにも見られません。その結果、きわめて強い固有の風土性が生まれ、種のレベルだけでなく、属や科のレベルでもこの島を独特の世界としています。マダガスカルはメガダイバーシティ・カントリーの最上位に位置する国であり、ブラジルの大西洋岸熱帯雨林と同じく、最優先で保護する必要のある5大ホットスポットの一つとなっているのです。

マダガスカルは、島のほとんどが熱帯に属し、ある種の生物群に関しては非常に生物多様性に富んでいます。とくに、日本の1.5倍という小さな面積を考えた場合、なおさら多様性の豊かさに驚かされます。例えば、アフリカ地域の面積のたった1.9%の地域に、アフリカ本土に見られるより多くの種類のランがあります。また、アフリカの植物の約25%の原産地となっています。高等植物では約11,000～12,000種があるとされ、なんとその80%が固有種です。爬虫類と両生類も多様であり、爬虫類がざっと300種、うち274種が固有種、カエルが178種、うち176種が固有種となっています。さらに新種の発見が毎年、相次いでいる状況です。

しかし、マダガスカルで最も人目をひく魅力的な生物は、なんと言っても霊長類で、マダガスカルは霊長類の最良の生息地です。霊長類と言っても、私たちがすぐ思い浮かべるモンキーやエイブ(尾なしザル)でなく、レミュー(キツネザル)です。現存しているレミューは、14の属、50の種と亜種、五つの科からなる非常に興味ある環境適応した多様性を持ち、100%この島に固有な生き物です(マダガスカルの近くのコモロ諸島にも生息していますが、コモロ諸島には人間が持ち込んだことがほぼ確実です)。マダガスカルの霊長類は、小型は霊長類の中で最も小さい体重わずか30グラムのピグミーマウスレミュー(*Microcebus myoxinus*)から、大型は中型犬くらいでテディベアとジャイアントパンダを掛け合わせたような外見をし、樹上カンガルーのように木から木へ飛び移るインドリ(*Indri indri*)のような種までいろいろです。レミューはたいへん不思議な種で、その中でもよく知られているのは神秘的なアイアイ(*Daubentonia*)です。アイアイは、確かに地球上で最も不思議な哺乳動物であり、*Daubentoniidae*科で現在生存している唯一のサルです。

マダガスカルが特別大きな重要性を持っていることは、次の事実からも分かります。すなわちマダガスカルに生息する霊長類だけで世界の種の12.8%、同じく属の21.0% (14/65)、そして科の36.0% (5/14) を占め、私たち人類に最も近い動物の保護という点で、最優先とすべき地域です。

マダガスカルの豊かな生物多様性については、まだほとんど分かっていないと言わざるを得ません。この国の動植物に関する基本的な生物学的目録を作成することが不可欠です。とくに、この国で最も多様性が豊かな東部熱帯雨林地域での調査が必要でしょう。この地域についてはまだほとんど調査の手が入っておらず、私は1984年に初めてマダガスカルへ行って見るまで、なぜ調査が行われなかったのか不思議でありませんでした。もっと遠いアマゾンより調査が難しいということはないはずだと思ったのです。

さて、熱帯雨林の調査がどんなものか、原始林の中がどんなに素晴らしいか、多くの人は大変ロマンチックなイメージを描いています。そう、確かに多くの点で素晴らしいと言えます。しかし、あえて申し上げるなら、ココヤシの林と白砂の浜辺と言うわけにはいきません。マダガスカル東部の熱帯雨林を訪れてみて、私はなぜこれまで調査が行われなかったか、その理由の一端が納得できました。ヒルです。ヒルのたくさんいる東南アジア諸国を含めて私は何度も熱帯雨林地域に出かけていますが、あれほど多くの、しかもしつこいヒルに出会ったことはありませんでした。幸いにも、ヒルによく効く地元産の“マンジリー”という植物があって、これを塗っておくかぎりヒルを寄せつけませんし、簡単に殺せます。ただし、周囲にマンジリーがないと厄介なことになります。

それにもかかわらず、なぜ、私たちがこんなにマダガスカルにこだわり、このように高い優先度を与えるのでしょうか。それは、マダガスカルは日本の1.5倍ほどの面積に約1,300万(日本の10分の1)と、人口密度はそれほど大きくないのですが、環境悪化の長い歴史を持っているからです。人間がこの島へやってきたのは今から1500~2000年前。東南アジアやアフリカからやってきた彼らは、マダガスカルの繊細な環境には全く不向きな土地利用法を持ち込みました。そのとき以来、環境に大きな影響を与えてきたのです。

これは、マダガスカル中央高原の写真です。かつては森林とサバンナが入り交じった土地でしたが、ご覧のように森はほとんど残っていません。この地域の土壌浸食は地球上のどの地域より深刻で、河川は毎年、削り取られた土で真っ赤な色をして流れています。最近、世銀が行った評価によりますと、マダガスカルでは浸食により失われている土壌の将来価値が3億ドル以上に上るとのことです。マダガスカルの自然林のざっと85~90%がすでに消失し、残りも薪や木炭にするために伐採されたり、焼き畑農業で失われつつあります。

狩猟も問題の一つです。ある種の動物は、一定部族以外には禁猟になっています。例えば、放射ガメは最南部のアンタンドロイ族に、インドリは東部熱帯雨林地域のベツイマサラカ族に狩猟が許可されているだけです。他の動物は常に狩猟の危機にさらされています。この男はマダガスカル固有種のクーア鳥を持っていますね。この人はレミュー(キツネザル)のワナを仕掛けています。これはマダガスカル北東部で行なわれている日帰りのレミュー狩りツアーの光景です。

マダガスカルについて私たちがしばしば口にする「突発的絶滅」が、単なる想像上の虚構だと思っている人がいたなら、過去2000年の間にどんな生物が絶滅してきたかを見ればいいのです。その中には、史上最大の鳥でダチョウより大きく、その卵は重さ10キログラムはあったというエレファントバード(Aepyornis)や、八つの属、15の種があったジャイアントレミュー(オオキツネザル) 現生種より大きかったです。ジャイアントレミューは、現在分かっているレミュー属の36%(8/22)を占めていました。また、オーストラリアの大型コアラに似て成長すると子牛ほどにもなるMegaladapisや、大人のオスゴリラより大きいArcheoindris(やはり絶滅した種で地上生活する北米のナマケモノと同様の生態的地位にあったと思われる)なども絶滅してしまいました。

コンサベーション・インターナショナルは、マダガスカルで精力的に活動してきました。とくに、東部熱帯雨林地方のザハメナ保護区や西部の乾燥した落葉樹林地帯のアンカラファンツイカ保護区といったこの国の自然保護区にある主要ターゲットに的を絞ってきました。私たちは、政策面にもかかわってきました。コンサベーション・インターナショナルの現在のプログラム・ディレクターは、元駐米大使で大蔵大臣も務めたレオン・ラジャオベリナ閣下です。私たちは、この国に外貨をもたらす将来的に有望な成長産業であるエコツアーを盛んにするために、保護区に焦点を置いた「マダガスカル・レミュー保護アクション・プラン-マダガスカル・レミュー・フィールドガイド」を作りました。また、1995年には、史上初の「生物多様性優先度決定ワークショップ」を、マダガスカルと世界各国の専門家を集めて開催しました。

その結果、マダガスカルではまだまだなすべき仕事は多く、満足にはほど遠いものの前途に明るさを感じられる状況が生まれています。私たちは現在、このユニークな国において環境保護の歴史の方向を変えることのできる位置にあると言えます。

スリナムとパプアニューギニア

具体的な地域の話として、最後に世界の二つの地域に注目していただきたいと思います。それは、ブラジルの大西洋岸熱帯雨林およびマダガスカル島というホットスポットとは全く対照的な地域を代表する、スリナムとパプアニューギニアです。多くの生物種がすでに失われているホットスポットとは違って、スリナムとパプアニューギニアは大熱帯原始林地帯の範疇に入ります。すなわち、ホットスポットと同様に生物多様性に富んでいながら、その自然植生がまだ手つかずに残されている点がホットスポットと異なっているのです。ここではまだ、天然資源に基づいた持続可能な発展が可能であり、原住民の部族の人々が伝統的な生活様式をある程度維持することが可能です。

まず最初に、南米のスリナムは、かつてオランダ領ギアナとして知られたオランダの植民地でした。1975年に独立し、三つのギアナ地方の独立国のうち、国土面積、人口規模とも2番目の国です。人口密度は世界最小に属し、16万6,000平方キロメートルの国土（日本の44%）に約40万人が住んでいます。しかも、国民のほとんどは、沿岸地帯、とくに首都パラマリボの周辺に集まり、内陸部に住んでいるのは5%にしかすぎません。スリナムは大木の熱帯雨林で国土が覆われているという点でも、世界に類を見ない特徴を持っています。森林の9割は人の手の入らない天然のままの状態にあり、地球的に見て重要な生物群系を持った広大な未開地帯が最もよく保存されている国の一つです。

スリナムの文化もユニークで、南米の他の国々と大きく異なっています。沿岸地方に住んでいるのはアフリカ系のクリオール人（31%）、インド系のヒンドスタン（37%）、ジャワ系のジャワ人（15%）以上は19世紀から20世紀の初めにかけて年季奉公人としてやってきた人々、中国人（2%弱）、オランダ人およびさまざまなヨーロッパ人（2%）などで、ヨーロッパ人の中には新世界に夢を求めた最古のユダヤ教徒集団の一つも含まれています。一方、内陸部にはいくつかのアメリカ原住民部族が住んでいます。トリオ族、ワヤナ族、アクリオス族、そしてブッシュネグロ（またはマルーン）族などです。とくにブッシュネグロ族は大変興味深い人々で、人口は約5万人、六つの部族に分かれており、アメリカ大陸で最後の逃亡奴隷文化を保ち、実際に西アフリカの生活様式をいまだに続けています。極めて孤絶した生活をしているグループで、何世紀もの間外界と交渉せず干渉もされずに暮らしてきました。

スリナムに対して地球の反対側にあるパプアニューギニアは、生物学的にも文化的にも地球上で最も興味深い国の一つでしょう。メガダイバーシティ・カントリーの一つ、パプアニューギニアは、人種的にも非常に多様な点で極めてユニークです。事実、日本より多少広い程度の比較的小さい国土に、ほかのどの国にも見られないほどの文化的多様性を持っています。面積47万5,369平方キロメートルの土地に、875種類の言語が飛びかっており、しかもそれぞれは全く没交渉なのです。スリナムと同じように、森林の大半が自然のまま残っていますが、その約97%を伝統的な原住民部族が所有しています。この点は、いまだに森林の多くがアメリカインディアンの所有になるアメリカやブラジルと似ています。ヨーロッパ諸国の植民地となった国には珍しいことです。

不幸にして、スリナムでもパプアニューギニアでも、人間文化と自然環境の調和統合は、現在、大きな圧力にさらされており、両国とも今後10年の間にホットスポット・カントリーの範疇に追いやられる危険があります。両国とも数世紀の間世界の開発者の眼から逃れてきましたが、今や国際的な木材コングロマリットや鉱山会社の注目するところとなっています。木材開発では、主としてマレーシア、次いでインドネシア、台湾、韓国の企業が進出しようとしており、鉱山開発ではさまざまな国、とくにカナダの企業が関心を示しています。私は“最後の天然資源の大規模草刈場”と呼んでいるのですが、不幸なことにこうした企業活動が新植民地主義的色彩を強烈に放っているのです。過去数世紀にわたるヨーロッパ人の植民地主義と同じように、当該国にほとんど何も残さず奪っていきます。木材企業の動きはとくにひどく、地元の林業法規を無視し、賄賂の風潮を広め、実際の収入を大幅に過小報告したりごまかしたりします。何より悪いことには、彼らに与えられた伐採権や採掘権の大半が5～10年の免税になっていることで、つまり当該国が、低賃金の肉体労働の雇用口のほかに得る利益はほとんどゼロです。実際、これら企業活動の経済学的分析によると、（世界資源研究所とコンサベーション・インターナショナルが共同で行ったスリナムの調査分析もその一つですが）当該国が得る現金収入は非常に小さいかほとんど取るに足らないことは

明らかです。さらに、実際の社会コストや環境コストを考慮に入れると、これらの貧しい国は唯一の長期資産である天然資源を提供することによって、金持ちの国際材木コングロマリットをいわば助成していることになり、国自体が清算解散する道をたどることになるのです。言うまでもありませんが、新時代の夜明けにあって、こうした略奪的な開発は許されるべきではありません。アメリカや日本のような国々がリーダーシップをとって阻止すべきだと思います。

コンサベーション・インターナショナルは、スリナム政府の高官や国際的な報道メディアと接触したり、さまざまな努力をしてきましたが、それによって、これまでのところスリナム国民にもっと彼らのためになる別の長期的道があることを納得してもらうのに成功しています。例えば、エコツーリズムやバイオプロスペクティング（生物探査）、木材以外の林産品の開発、そしておそらくは共同実施や炭素等価交換も考えられますし、環境に負担の少ない木材伐採の方法もあるでしょう。こうした活動の結果、スリナム国民は、スリナムの森林の20%以上にあたる約300万ヘクタールの伐採権を与えるよう要求していたマレーシアの1企業とインドネシアの2企業の要請を拒否しました。原住民の人々、とくにブッシュネグロ族もまたこの伐採権に反対しました。彼らの知らないうちに、部族の土地の一部が伐採予定区域に含まれていたのです。

パプアニューギニアでは、状況は残念ながらずっと複雑です。国際企業はずっと深く根を下ろし、ときには政治不安の原因にもなっています。銅山開発をめぐるブーゲンビルの危機は過去10年の大問題となりました。前の政権サー・ジュリアス・チャン内閣は、伐採権と採掘権をめぐる騒動で今年初めに退陣しました。しかし、マレーシア企業はパプアニューギニア各地に根を張って、広大な森林をすっかり自分のものとして利用していました。地方の土地所有者はだまされて土地利用書に署名させられていましたが、やがて国中で抵抗の気配が出てきており、メラネシアでも同じ動きを見せています。隣のソロモン諸島などでは、読み書きのできない地主が契約書にサインするケースが見られ、地主が事の真相に気づいて抵抗を始めないうちにできるだけ多くの木材を収穫しておこうと、伐採は1日24時間、夜間には煌々と照明をつけて行われています。

これらの主要熱帯自然地域でコンサベーション・インターナショナルが果たす役割は、現在のような略奪的開発に代わる道があることを人々に教え、他の熱帯雨林諸国で行われている生物多様性の合理的な利用に基づく成功例を知らせることです。とくにうまくいったのは、スリナムの国会議員代表団を2回にわたってコスタリカに派遣し、ホセ・マリア・フィゲレス大統領との会談を実現させたケースです。スリナムの議員団は、この賢明な国でエコツーリズムやバイオプロスペクティングがどのように行われているか、直接目にしたのでした。

生態系の保全 - 私たちがとった総合的方法

これまでお話ししてきたのは、生物多様性保全という面で私たちが直面している問題のいくつかと、私たちの組織が活動している優先的事例のいくつかでした。次に、私たちの生物多様性保全プログラムで採用しているツールと、私たちの特定の活動についてお話ししたいと思います。コンサベーション・インターナショナルの使命は、「地球の生物多様性を保全し、人間が自然と調和して共存できることを皆に示して見せること」です。そのために私たちがとった総合的方法を一言で言いますと、いわゆる「生態系の保全」というアプローチで、ローカルな能力の構築とローカルな人々をあらゆる生態系保全活動に参加させることに重点を置いています。

私たちは、真に国際的な組織であることを誇りに思っています。本部はアメリカのワシントンDCにあります。私たちが活動している17か国に全国事務所があり、大半の事務所のスタッフは当該国の人間です。私たちのスタッフは、世界20数か国から集まり、使用している言語は30を超えます。フィールドワーク中心の活動計画は、私たちのいわゆる礎石、つまりとくに科学、経済学、政策、コミュニケーションに基づいて立てられ、すべてのプログラムがなんらかの保護地域を焦点にしています。

科学プログラム

コンサベーション・インターナショナルの礎石の中でも最も基本的なものは、おそらく「科学」でしょう。私たちの信念は、健全な科学的土台なくしてはどんな保護活動や持続可能な発展も達成できないということにあります。私たちの科学プログラムは二つ、現地での生物学的研究に重点を置く「保全生物学

(Conservation Biology)」と、最先端の情報技術に重点を置く「生物多様性保全計画および技術協力 (Conservation Planning and Technical Cooperation)」です。

コンサベーション・インターナショナル特有の科学プログラムに、「Rapid Assessment Program (RAP = 迅速評価プログラム)」があります。RAPは、世界で最も優れたフィールド生物学者を動員して、まだ解明されるところの少ない熱帯の生態系を迅速に評価する方法です。その方法論は、主に南米の熱帯アンデス地域で活躍している超一流の科学者グループが完璧なものに仕上げ、現在は南米のほかの地域やメラネシアにも応用されています。マダガスカルでも、別のプログラムが間もなく開始されることになっています。熱帯諸国から将来のRAP 専門家を育て上げることが、プログラムの遂行上、緊要事項となっています。

当初、RAPの対象は陸上の生態系が中心でした。しかし、ここ2年間で、海の生態系を対象にしたMarine RAPと、淡水生態系用のFreshwater Aquatic RAPというプログラムもスタートさせています。いずれもその目標はこれら生物群系の迅速な評価にあります。海洋と淡水用のRAPは、熱帯雨林等の陸上生態系RAPほどには生物多様性関係者から注目をまだ浴びていません。

コンサベーション・インターナショナルのもう一つのユニークなプログラムは、Regional Priority Setting Workshop(地域優先度設定ワークショップ)です。1990年にブラジルのマナウスで開催したアマゾンに関する会合に始まったこれらワークショップは、世界各地のホットスポットについてその具体的優先度を詳細に検討するものです。地域ワークショップは、プロジェクトごとに正確になにをする必要があるのか、つまり“ホットスポット中のホットスポット”はどこか、保護活動を実際に行わなければならないのはどこかを決定するため、ホットスポットやそのほかの優先地域で開催します。優先度設定作業は専門家の主導で行われますが、当該地域の科学者や政治家からも支援が得られるように配慮します。この種のワークショップは、すでにブラジルのアマゾンや北東部大西洋岸熱帯雨林、メキシコの南東部大西洋岸森林地帯やコルテス海、同じくメキシコのマヤン地域、グアテマラ、ベリーズ、パプアニューギニア、イリアン・ジャヤ(西イリアン)、マダガスカルなどで行われており、近い将来、ブラジルのセラド地域や西アフリカでも計画されています。こうした優先度設定ワークショップに対してアメリカや日本の政府が熱心に支援していることも、ぜひ申し上げておきたいと思います。つい最近ですが、日本外務省と米国国際開発庁は共同で、コンサベーション・インターナショナルの主催するイリアン・ジャヤのワークショップに協賛してくださいました。

コンサベーション・インターナショナルでは、国際自然保護連合(IUCN)とも連携しています。とくに、連合傘下の「種の保存委員会」(SSC)とは緊密に協力し合っています。この委員会は、生物多様性専門家をメンバーとする世界最大のボランティアネットワークで、8,000人の会員が100以上の専門グループに分かれて活動しています。私は1977年以来、霊長類専門グループの委員長を務めています。私たちはSSCを通じて、いろいろなニューズレターや雑誌を発行しています。一例をご紹介しますと、『霊長類保護ジャーナル』『4種類の霊長類ニューズレター(アジア、アフリカ、マダガスカル、ネオトロピカル)』『ネオトロピカルコウモリ類ニューズレター』『貧歯類ニューズレター』『カメ類保護・生物学ジャーナル』といったものです。また、最近、IUCNの『レッドデータブック/レッドリスト』の発行も手がけるようになりました。この資料は絶滅の危機にある生物種に関する基本的資料であり、この30年間自然保護活動を支える支柱となってきたことはご存じの通りです。私たちは多様な熱帯生物に関する簡便な情報源として、『熱帯フィールドガイドシリーズ』の刊行も開始しました。これはカエルやチョウからカメやサルまで、なんでも“ライフスティング”あるいは“ウォッチング”しようという専門別エコツーリズムへの関心を高めるのが狙いです。

事業開発プログラム

コンサベーション・インターナショナルは、“経済”も非常に重視しています。優れた生物多様性保全活動はビジネスとしても優れていること、自然の生態系を保全すると同時に国と地方の“ボトムライン”(経済的基盤)にも役立つような“一挙両得”の解決策が可能であることを実証して見せることが肝心でしょう。私たちは、すでにくつつかの事業開発プログラムを行っています。例えば、エコツーリズム、非木材林産品、バイオプロスペクティングといったプログラムで、そのほか熱帯地方における持続可能な木材収穫の可能性について研究中です。木材以外の林産品について言えば、私たちの旗印とも言うべき産品は、「タグア」、つまりエクアドルやコロンビアに生えているヤシの実で、「植物の象牙」と言われてきたものです。主として衣服のボタンの材料に使われ、今ではさまざまなアメリカの企業、例えばバナナ・リパブリック、GAP、

パタゴニア、ウォルマートなどが顧客になっています。タグアの用途は、まだまだ考えられるでしょう。すでに、腕のいい日本の根付けの彫刻業者数社が材料に使ってくれていますし、原子炉の洗浄剤に粉末タグアを使えないかと日本企業から引き合いがありました。

スリナムにおける私たちのバイオプロスペクティング・プログラムは、サラマッカネルのブッシュネグロ族に焦点をあて、彼らに昔から伝わる植物学的知識から学ぼうとするものです。アメリカの国立保健研究所（NIH）と製薬会社プリストル・マイヤーズ、ミズーリ植物園、スリナム政府の国立医薬品研究所とも共同して、今後こうしたプログラムを行うにあたっての新基準を設定しました。当該国および地域社会に十分なロイヤルティーを支払い、シャーマン（薬草人）や村が特許権を持つ道を開き、ロイヤルティーの一番の恩恵が当該部族の人々にいくように、「Forest People's Fund」を設けたのです。同様のプログラムは、現在、マダガスカルやそのほかのいくつかの熱帯諸国で検討されています。

政策プログラム

私たちの三つ目の礎石は、「政策」です。と言いますのは、最高の科学と最強の経済的インセンティブをもってしても、もし自国や外国の政策が意地悪く自分たちの目的を妨げるならば、多様性保存の努力も失敗に終わる可能性があると考えからです。私たちの政策プログラムは多面的に組まれており、さまざまな問題を扱っています。1987年にボリビアで行った“自然と負債のスワップ”に始まって、私たちは常に資金調達システムの構築に配慮し、保護活動の資金が1ドルでも増えるように心がけてきました。ボリビアの自然と負債のスワップに続いて、メキシコ、コスタリカ、マダガスカルでもこれを実施しました。これらのうちいくつかの国では、まだ有効に機能しています。しかし、最近では、“寄付疲れ”が出たり大口寄付者が他の寄付先に移ったりしても、生物多様性プロジェクトの長期的安定が図れるように、トラストファンド方式をとるようにしています。

コンサベーション・インターナショナルのプログラムでは、いろいろな産業、とりわけ石油・天然ガス産業における“best practices（最善策）”の開発・実施に大きな重点を置いています。コンサベーション・インターナショナルの政策レポート『Re-inventing the Well』は、石油産業に大きな影響を与え、ペルーのタンボパタ・カンダモ地区ではモービルと共同で革新的なプログラムを実施し、石油探査の監視・評価方法として新たに生物多様性に基づいた新基準を作りました。一方、コンサベーション・インターナショナルの資源エコノミスト、リチャード・ライス博士もまた、熱帯雨林における木材伐採の新基準を開発しつつあり、そこでは、持続可能な木材伐採の究極的目標はコストをかけて木材生産を維持することではなく、伐採対象となる森林の生物多様性を維持することであるというコンセプトを導入しようとしています。博士の新しい見解は議論的となるでしょうが、この問題については、別個に詳しいレクチャーが必要でしょう。

私たちは、アメリカからブラジル、そしてマダガスカルに至るまで、生物多様性に関する法律についても、影響力を及ぼすよう働きかけています。また、世界銀行や国際金融公社(IFC)、地球環境ファシリティ(Global Environment Facility：本部は世界銀行に置かれています)といった国際機関に必要な改革をも提唱してきました。

国際コミュニケーションプログラム

最後に申し上げたいのは、コミュニケーションの重視という点です。私たちは多様性保全に対する支援が、最高位の政策決定者から保護対象地域の近辺に住む貧しい村人に至るまで、社会のあらゆる層と分野の人々から最終的に得られなければならないと考えています。そうした支援を引き出すため各地域に合った戦略開発に使われるのが、コンサベーション・インターナショナルの「国際コミュニケーション・プログラム」です。このツールを活用して、各国ですぐに使えるようなビデオその他の広報材料を提供しています。私たちの「ワシントンDCメディア・プログラム」は、生物多様性に関係する新聞・テレビを中心に、各国メディアや国際メディアがこの問題を取り上げるように日夜努力しています。

私たちは23か国で生物多様性保全のために活動していますが、こうしたいろいろな“ツール”はさまざまに組み合わせられて、それらの国々で最も効果的かつ文化的に有効な多様性保全プログラムが生まれるのです。私たちのプログラムは、どの国、どの地域に対しても大きな影響を与えていると思います。私たちの存在がなにかを生み出さない場合、その地域に関わるべきでない、また私たちに“生物多様性保全の歴

史を変える”現実的なチャンスがある場合にだけ活動すべきだというのがコンサベーション・インターナショナルの基本的信条なのです。

生物多様性の保全を夢から現実へ

新しい世紀への門口にあって、言うべきこと、なすべきことを尽くしたとき、人類史上のこの重要な分岐点において私たちが立っているのはどんな世界でしょうか。世界全体が結局マダガスカルのこの荒廃した中央高原のようになってしまうのか、それともなんらかの解決策を編み出し、自然と、私たち人類のニーズや希望との間に一定の調和が生まれるチャンスが本当にあるのか。私は生来楽観主義者ですから、私たちが非常に大きな前進をしたこと、とくにこの5年間の進歩は大きかったと確信しています。1992年6月のリオデジャネイロにおける地球サミットは過剰な批判や過小評価の憂き目にあっていますが、私はあの地球サミットが生物多様性保全の歴史のターニングポイントになったと考えています。地球サミット以来、各国政府や多国間銀行、二国間援助機関、いろいろな国連機関、そしてその他主要組織の態度に、非常に重要な変化の芽生えが見られるようになりました。世界銀行その他の国際融資機関は1980年代半ばごろまで環境保護関係者から“敵”と見られてきました。しかし、今や大きく方向転換し、ゆっくりとですが生物多様性保存の味方になりつつあります(世銀グループの中にはまだまだ改革が必要な部分があることは確かで、とくに国際金融公社(IFC)ははなはだ遅れています)。

1988年に、世界銀行は史上初の生物多様性タスクフォースを設置しましたが、私はその委員長を仰せつかりました。およそ銀行の辞書に“生物多様性”なる言葉が初めて登場したのはこのときからです。しかし、このときは実質的に何も行われませんでした。それから9年たった現在、世界銀行は生物多様性保全問題で主要な活動組織となっており、ジム・ウォルフエンソン総裁の有能なリーダーシップのもとでさらなる前進がなされるであろうと期待しています。世界銀行と国連開発機関(UNDP)ならびに国連環境計画(UNEP)の共同計画である地球環境ファシリティ(GEF)は、1993年以降、数億ドルを生物多様性保全活動に投じています。リオの地球サミットが生んだもう一つの成果である「生物多様性会議」も、この問題に関する国際法的枠組みを制定したり、定期的に国際フォーラムを開催しています。

しかしながら、最も頼もしい進展はなんとと言っても民間の関心の高まりでしょう。ここ数年、そしてやはり地球サミット以来のことですが、地球環境改善に役立つことを心から願い、“緑(自然)”が人間の生活の根本であることを理解している新しい企業家たちが台頭してきております。日本においては私たちコンサベーション・インターナショナルは、過去6年間、(社)経済団体連合会の方々と大変良好な関係を結んできました。経団連では熱帯諸国での有意義なプロジェクトを支援するために、「経団連環境保護基金運営協議会」(会長/後藤康男・安田火災海上保険会長)を設立しました。私たちと日本とのこうしたパートナーシップは、ハイテクを使った環境保護と環境教育の分野でリーダーシップを発揮しているNECやソニーなど先端技術企業との間でも、素晴らしい協力関係を築いています。一方、アメリカではインテルやユナイテッド航空、モービル、マクドナルド、ディズニー、その他いくつかの企業が生物多様性保全を積極的に推し進めています。熱帯諸国について申し上げますと、メキシコのパルサーやペメックス、あるいはブラジルのユニバンコやバンコ・リアルといった企業が主な支援者となって、日本やアメリカと同様の傾向が見られます。世界の動向は民間が実質的に動かしている、少なくとも大きな影響を与えていると言えますから、私たちはこの新しい動向に大いに勇気づけられ喜んでいきます。

生物多様性保全という分野において、日本の果たす役割は極めて大きいものがあります。世界の経済大国として、また急成長するアジアのリーダーとして、日本の行動は他国の手本になっていると言えます。日本は環境問題全般でも、また生物多様性保全の問題に関しても、指導的役割を果たす必要があります。しかも頼もしいことに、事実そうなりつつある兆候が確実に見られます。5年前には非常に意義のあるブループラネット賞が創設されました。私はブループラネット賞が環境分野のノーベル賞に匹敵すると思っておりますが、この賞の創設はまさにこうした兆候の一つです。私たちコンサベーション・インターナショナルは、このたびこの栄えある賞に選ばれたことを心から名誉に思っています。

本日の講演の最後のメッセージとして、私たち全員が生物多様性保全について明るい見通しを持っていることを申し上げたいと思います。環境破壊や種の喪失、環境災害など暗い話が際限なく報告されているにもかかわらず、サクセスストーリーもまた確実にあるのです。私たちはそこから学び、前進し、可能なかぎり成功例を増やしていかなければなりません。日本やアメリカなどの先進国に対して、生物多様性保

全問題への一層の関心と経済的支援、および技術的支援をお願いしていくつもりです。しかし同時に、私は生物多様性に富む熱帯の国々の仲間と一緒に活動することによって、未来の世代のために地球上の生命の維持に役立ち、かつ人々の真のニーズに役立つような解決策を実行できるのではないかと考えます。生物多様性保全の道は“可能性あるものへの技術 (the art of the possible)” と考えればよいのです。もしそれができれば、生物多様性保全という今日の夢が必ずや明日の現実となることを確信しています。

ブループラネット賞

ブループラネット賞は、地球環境問題の解決に向けて、科学技術の面で著しい貢献をした個人または組織の業績を称え、感謝を表わすとともに、多くの人がこの人類共通の課題に立ち向かう意欲と意識を高めることを目的として、平成3年に創設された地球環境国際賞です。

毎年原則として2件を選定し、受賞者にはそれぞれ賞状・トロフィーならびに副賞賞金5,000万円を贈呈します。

対象分野

- ・地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、熱帯林の減少、生態系破壊や種の絶滅、砂漠化の進行、河川・海洋汚染などの地球環境問題全般。
- ・エネルギー・食糧・人口問題、環境倫理・政策、廃棄物処理・リサイクリングなど、地球環境の保全や自然保護と密接に関連する諸問題。

候補者の資格

- ・国籍、性別、信条などは問いません。
- ・個人(グループ)、組織のいずれも対象となります。グループの場合は1グループを1名と見なします。

選考のしくみ

- ・毎年8月から10月にかけて、国内外のノミネーターに候補者の推薦を依頼し、その中から授賞候補を選出します。
- ・選考委員による数次の審議および海外アドバイザーからの意見をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会・評議員会が受賞者を正式決定します。

歴代受賞者

・平成4年度(第1回)受賞者

真鍋淑郎博士(米国)米国海洋大気庁上級管理職

受賞業績“数値気候モデルによる気候変動予測の先駆的研究で、温室効果ガスの役割を定量的に解明”

国際環境開発研究所(IIED)(英国)

受賞業績“農業、エネルギー、都市計画等、広い領域における持続可能な開発の実現に向けた科学的調査研究と実証でのバイオニアワーク”

・平成5年度(第2回)受賞者

チャールズ・キーリング博士(米国)カリフォルニア大学スクリップス海洋研究所海洋学教授

受賞業績“長年にわたる大気中の二酸化炭素濃度の精密測定により、地球温暖化の根拠となるデータを集積・解析”

国際自然保護連合(IUCN)(本部・スイス)

受賞業績“自然資産や生物の多様性の保全の研究とその応用を通じて果たしてきた国際的貢献”

・平成6年度（第3回）受賞者

オイゲン・サイボルト博士（ドイツ）キール大学名誉教授

受賞業績 “ 海洋地質学を核としたヘドロの沈積予測、大気・海洋間の二酸化炭素の交換、地域の乾燥化予測等地球環境問題への先駆的取組み ”

レスター・ブラウン氏（米国）ワールドウォッチ研究所所長

受賞業績 “ 地球環境問題を科学的に解析し、環境革命の必要性、自然エネルギーへの転換、食糧危機等を国際的に提言 ”

・平成7年度（第4回）受賞者

バート・ポリン博士（スウェーデン）ストックホルム大学名誉教授 / IPCC 議長

受賞業績 “ 海洋、大気、生物圏にまたがる炭素循環に関する先駆的研究および地球温暖化の解決に向けた政策形成に対する貢献 ”

モーリス・ストロング氏（カナダ）アース・カウンシル議長

受賞業績 “ 地球環境問題解決に向け実地調査と研究に基づいた持続可能な開発の指針の確立、地球規模での環境政策に対する先駆的貢献 ”

・平成8年度（第5回）受賞者

ウォレス・ブロッカー博士（米国）コロンビア大学教授

受賞業績 “ 地球規模の海洋大循環流の発見や海洋中の二酸化炭素の挙動解析等を通して、地球気候変動の原因解明に貢献 ”

M.S. スワミナサン研究財団（インド）

受賞業績 “ 持続可能な方法による土壌の回復や品種の改良を研究してその成果を農村で実証し、「持続可能な農業と農村開発」への道を開いた業績 ”

（受賞者の所属・役職は受賞当時のものです）

旭硝子財団の概要

目的

次の世代を拓く科学技術に関する研究助成、人類がグローバルに解決を求められている課題への貢献に対する顕彰などを通じて、人類が真の豊かさを享受できる社会および文明の創造に寄与すること。

事業の内容

1. 研究助成事業

- | | |
|------------------|----------------|
| (1) 自然科学系研究助成 | (5) 国際会議助成 |
| (2) 人文・社会科学系研究助成 | (6) 海外研究発表助成 |
| (3) 総合研究助成 | (7) その他の助成関連活動 |
| (4) 海外研究助成 | ・ 研究助成成果発表会の開催 |

2. 顕彰事業

- (1) 地球環境国際賞「ブループラネット賞」
- (2) その他の環境関連活動
 - ・ ブループラネット賞受賞者記念講演会の開催
 - ・ 環境アンケート調査 「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート調査」と題して、世界で環境問題にたずさわる政府や民間の有識者を対象に毎年1回実施し、結果を公表。

3. 関連活動

- (1) 出版活動（定期出版物の発行）
 - ・ 年報
 - ・ afニュース（財団活動全般を国内および海外に伝えるニュースレター。年2回発行）
 - ・ 助成研究成果報告
 - ・ ブループラネット賞受賞者記念講演会講演録
 - ・ 環境アンケート調査結果報告書
 - ・ 研究助成成果発表会講演資料
- (2) インターネット・ホームページ
 - ・ 事業活動の内容、ニュース、発表会・講演会、出版物等の紹介
 - ・ ブループラネット・アップデート 地球環境関連催事・刊行物情報を網羅する情報を紹介。

財団のあゆみ

- 昭和8年(1933) (財)旭化学工業奨励会設立。
- 昭和9年(1934) 大学の応用化学分野への研究助成を開始。
- 昭和36年(1961) (財)旭硝子工業技術奨励会に改称。
- 昭和57年(1982) 海外研究助成を発足。タイ・チュラロンコン大学への助成開始。
- 昭和63年(1988) インドネシア・バンドン工科大学への助成開始。
- 平成2年(1990) (財)旭硝子財団に改称。研究助成と顕彰を二本柱とする新事業展開を開始。
- 平成4年(1992) 第1回ブループラネット賞表彰式を挙行（以後毎年開催）。
- 平成5年(1993) 『有機金属が科学にもたらすもの』をテーマに第1回国内研究助成成果発表会を開催。米国オクラホマ大学に冠講座を創設。
- 平成6年(1994) 『ガラスの科学の新しい展開』をテーマに第2回国内研究助成成果発表会を開催。
- 平成7年(1995) 『分子生物学と生物工学』をテーマに第3回国内研究助成成果発表会を開催。
- 平成8年(1996) インターネットホームページを開設。
『物性研究と工学の接点』をテーマに第4回国内研究助成成果発表会を開催。
- 平成9年(1997) 『環境・組織・人間』をテーマに第5回国内研究助成成果発表会を開催

基本財産および事業規模

平成8年度末資産総額 115億円 平成9年度事業予算 6.2億円

役員・評議員（平成9年10月1日現在）

<役員>

| | |
|------|---|
| 理事長 | 古本次郎 旭硝子(株)取締役相談役・前会長・前社長 |
| 副理事長 | 岩崎寿男 元三菱自動車工業(株)常務取締役 |
| 専務理事 | 白神修 元旭ペンケミカル(株)取締役社長 |
| 理事 | 伊藤滋 慶應義塾大学教授、東京大学名誉教授 |
| | 兒玉幸治 商工組合中央金庫理事長、元通商産業事務次官 |
| | 近藤次郎 中央環境審議会会長、元日本学術会議会長 |
| | 坂本朝一 日本放送協会名誉顧問・元会長 |
| | 菅野卓雄 東洋大学学長、東京大学名誉教授 |
| | 瀬谷博道 旭硝子(株)取締役社長 |
| | 田中健蔵 国際東アジア研究センター理事長、九州大学名誉教授・元学長 |
| | 永井道雄 (財)国連大学協力会理事長、元文部大臣 |
| | 沼田眞 (財)日本自然保護協会会長、千葉大学名誉教授 |
| | 平岩外四 (社)経済団体連合会名誉会長、東京電力(株)相談役・元会長・元社長 |
| | 福井三郎 (財)バイオインダストリー協会会長、京都大学名誉教授 |
| | 向坊隆 (社)日本原子力産業会議会長、東京大学名誉教授・元総長 |
| | 諸橋晋六 三菱商事(株)取締役会長 |
| 監事 | 伊夫伎一雄 (株)東京三菱銀行相談役・(株)三菱銀行元会長・元頭取 |
| | 飯野地雄 元岩城硝子(株)取締役社長 |

<評議員>

| | |
|--|--|
| | 石井威望 慶應義塾大学教授、東京大学名誉教授 |
| | 石川忠雄 慶應義塾大学名誉教授・元塾長 |
| | 石川六郎 鹿島建設(株)取締役名誉会長・元社長、日本商工会議所名誉会頭 |
| | 犬養智子 評論家 |
| | 内野哲也 前(株)旭硝子総研取締役社長 |
| | 梅原猛 国際日本文化研究センター顧問・前所長 |
| | 神谷和男 中小企業信用保険公庫総裁、元旭硝子(株)取締役副社長 |
| | 木田宏 (財)新国立劇場運営財団理事長、日本学術振興会顧問・元理事長 |
| | 小泉明 産業医科大学学長、東京大学名誉教授 |
| | 小島清 一橋大学名誉教授 |
| | 清家清 東京工業大学・東京芸術大学名誉教授 |
| | 寺田治郎 元最高裁判所長官 |
| | 中根千枝 (財)民族学振興会理事長、東京大学名誉教授 |
| | 福井謙一 基礎化学研究所所長、京都大学名誉教授 |
| | 松永信雄 (財)日本国際問題研究所理事長兼所長、元駐米大使 |
| | 三村庸平 三菱商事(株)相談役・前会長・元社長 |
| | 宮田義二 松下政経塾塾長、日本鉄鋼労連最高顧問 |
| | 武者小路公秀 明治学院大学教授、元国連大学副学長 |



財団法人 旭硝子財団

〒102 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F

THE ASAHI GLASS FOUNDATION

2nd Floor, Science Plaza, 5-3, Yonbancho
Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan

Phone 03-5275-0620 *Fax* 03-5275-0871

E-Mail post@af-info.or.jp

URL <http://www.af-info.or.jp>

本プログラムは再生紙を使用しています。

Printed on recycled paper.